



生活習慣病予防のための 食生活と腸内フローラ

日時

平成 28 年 7 月 7 日(木) 13:15~16:40

会場

つくば国際会議場 大会議室 101号室

(茨城県つくば市竹園2-10-3) <http://www.epochal.or.jp>

主催: フード・フォーラム・つくば / 共催: 農研機構 食品研究部門

参加費: 無料 会員外: 1,000円

挨拶

13:15~13:20

日高 博志 氏 (フード・フォーラム・つくば 幹事長)

鍋谷 浩志 氏 (農研機構 食品研究部門 部門長)

講演1.

13:20~14:20



「食と腸内細菌代謝産物を介した 宿主のエネルギー代謝制御」

木村 郁夫 氏 (東京農工大学大学院 農学研究院 応用生命化学専攻
代謝機能制御学研究室 テニュアトラック・特任准教授)

食品由来の、特に食物繊維由来、腸内細菌代謝物である短鎖脂肪酸や、食用油、リノール酸、 α リノレン酸に代表される ω 6-、 ω 3-脂肪酸の腸内細菌代謝脂肪酸による、宿主生理機能への影響について、脂肪酸受容体群を介したエネルギー代謝制御の観点から概説する。

講演2.

14:20~15:20

● 休憩 15:20~15:40



「乳酸菌・発酵乳の健康機能について」

木村 勝紀 氏 (株式会社明治 研究本部 食機能科学研究所 グループ長)

プロバイオティクスとは、「適切な量を摂取することで宿主に有益に働く生きた微生物」のことをいい、その代表的なものが乳酸菌である。本発表では、乳酸菌・発酵乳の様々な健康機能について、我々の研究成果を中心に紹介する。

講演3.

15:40~16:40



「DOHaD仮説の概念と分子機構 ～生活習慣病の先制医療に向けて～」

小川 佳宏 氏 (東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科
分子内分泌代謝学分野・教授)

胎児期から乳児期は最も可塑性が高い時期であり、この時期の栄養環境がエピゲノム記憶され、成人期の生活習慣病の発症に関連することが示唆されている(DOHaD仮説)。DOHaD仮説の概念の理解と分子機構の解明により、エピゲノム情報に立脚した「生活習慣病の先制医療」の実現が期待される。